

**●立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋研究科国際協力政策専攻  
「アジア太平洋の環境保全開発リーダー育成」の事例 <人社系>****具体的に何を実施したのか**

- ・これまでのカリキュラムでは、開発経済・国際行政・環境管理・観光管理分野に関わる様々な環境問題・社会的問題を、人間活動の側面から捉えて学んでいたが、本プログラムにて新規5科目（「地球環境気候学特論」、「応用保全生物学」「環境動態解析・モデリング・アセスメント」Ⅰ／Ⅱ、「GIS（地理情報システム学）」）を開講、各科目を内容に応じて研究科共通科目・専門科目として配置し、各レベルにおいて社会学分野に加え環境科学生態学ならびに環境解析アセスメントに重点をおいた科目を履修できるようなコースワークの体系を整えた。

**実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと**

- ・「環境動態解析・モデリング・アセスメント」については、初年度は生態モデリングを主軸とする内容とGIS解析によるデータ解析に関する内容をいずれも組み込んで1講義で実施したが、それぞれにより焦点を当てた学修が進められるように、2010年度以降は「環境動態解析・モデリング・アセスメント」をⅠ、Ⅱと2科目に分けて開講した。
- ・「地球環境気候学特論」と「応用保全生物学」については、プログラム学生以外の専攻学生にも受講を認め、他の分野を主専攻とする学生との議論を深めることにより、様々な観点を取り入れて議論を深めるようにした。

**どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか**

- ・社会学分野からの環境問題を扱う科目だけでなく、環境を科学的に分析する知識・能力を身につける科目をコースワークに体系的に組み込むことが出来た。
- ・学生は、科目の履修を通して環境問題の影響を科学的に分析するためのデータ解析を行い、社会的視点到科学的視点を加え、環境問題を学際的に捉え、総合的な解決方法を導き出す力を身につけた。

**●立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋研究科国際協力政策専攻  
「アジア太平洋の環境保全開発リーダー育成」の事例 <人社系>****具体的に何を実施したのか**

国内・海外を含め、フィールドスタディ（現地調査）を3年間で6回実施した。フィリピン・パラワン州、大分県、三重県、沖縄県（2回）、長崎県へ赴き、マングローブ林・地下河川・ゴム木の植林地・ごみ埋め立て地の視察、簡易水質検査・汚濁質測定・電気化学的方法による水質測定法に関する実験、環境配慮型工場や生物保護センター訪問、現地大学研究所における意見交換・ワークショップ開催等を行った。

**実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと**

フィールドスタディは、いずれも本プログラムのコーディネータあるいは担当教員の学外ネットワークを活用したことにより、研修内容や研修行程、調査・観察地の選定を事前に専門的立場の研究者からアドバイスを受けながら計画を立て、本プログラムにおけるフィールド・スタディの目的に照らして詳細を組むことができた。

**どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか**

- ・短期間ではあっても、参加したプログラム学生個々の研究分野を網羅したのもとなり、本プログラム最終報告会において、学生より「フィールドスタディの体験を通して、環境についての理解を深めることが出来た」との意見が多数得られたことから鑑みても、プログラム学生の環境問題に対する体験的理解を促すと同時に、将来につながる深い見解を得るのに非常に有効であったと言える。中には、フィールドスタディで学習したことをテーマに修士論文を執筆をした学生もおり、その後、博士後期課程にて同研究を進めている。
- ・フィールド先で受入れをした研究機関の専門家とのネットワークを学生が得ることが出来た点でも大きな効果があった。

**●立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋研究科国際協力政策専攻  
「アジア太平洋の環境保全開発リーダー育成」の事例 <人社系>****具体的に何を実施したのか**

国内外の環境分野における有識者・研究者を招へいし、各年度で国際シンポジウムを実施するとともに、他大学の大学院生（三重大学大学院生物資源学研究科）との共同研究事業の一環として国際ジョイントワークショップ等も企画・実施した。また、最終年度には本教育プログラムの最終報告会として「国際ラウンドテーブル」を開催した。開催件数は3年間で6回。

**実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと**

教員のネットワークを利用し、国内・海外の両方から、環境分野で研究実績や環境分野における実績の高い研究者・専門家を呼び、国際的標準から見ても質の高いシンポジウムとし、学生が知的刺激を受けることが出来、深い議論とネットワーク作りができるように計画をし、実行をした。

**どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか**

- ・従来、博士前期課程においては、通常行なわれる学外者とのシンポジウムにおいて学生自身が発表を行う機会は限られているが、ENVOLのシンポジウムではプログラム学生の研究発表を必須とし、継続的に発表の機会を与えたことで、学生のプレゼンテーション能力が向上した。あわせて、自身の研究内容について質疑応答を数多く経験する中で、専門的な意見を即時に理解し、的確に回答するという能力にも成長が見られた。
- ・本研究分野の第一線で活躍する研究者や実務者からの講演により、プログラム学生は専門知識を修得することに加え、直接に講師と意見交換を行う機会を通じ、新たなネットワークを構築することができた。